7月総評

西躰　かずよし

君の「うん。」は
海風の檸檬

長谷川柊香　　宮城県

海風の檸檬には、おそらく実体がない。それもあってだろうか、「うん。」という返事は、僕たちに虚ろに響く。その返事と、檸檬の間に感じられる違和感の正体は、「海風の檸檬」という、ことばの清潔さにあるだろう。作中の君は、はかなくも美しいものとして、その場に佇んでいる。

同じ書き手の作品に「ソファにぽつんと／漂着物めく／うつ病の／微笑の／君」というのがあるが、こちらの作品のなかの君も、同じ印象のなかに置かれている。

本も食事も同じ机の花野です

奥井　健太　　滋賀県

すべて同じだよ、と言ってしまうやさしさ。そんなやさしさは、偽善めいて見えることがある。ただ、この作品がそうならないのは「同じ机の花野です」という言い切りにある。いつもなら同じところにない本と食事が、同じ机に並ぶ。整理されないままであってもいいという感覚は、書き手がことば以前への問いかけを失わずにいるところから来るのかもしれない。

神託を受けた
しょうじょの顔をして
ほっとけーきのようにめざめる

さいう　　石川県

ホットケーキは、少女と日常とのつながりを表しているかのようである。神託を受けてホットケーキのように目覚めることは、すこし滑稽にも感じられる。けれど少女にとっては、それが夢ではなく、朝の一部でしかなかったから、いいようのない悲しみとして感じられた

のだろう。

自販機の種を浜辺に蒔く子供

千葉羅点　　愛媛県

語り手にとっての自販機は、自身と同じように生きる存在として表現される。あらゆるものと自身に境界を引かないやさしさは、ときに生の残酷さを内包するのかもしれないとも思う。

ここでは、子どもは永遠に種を蒔き続けるかのように描かれる。それは、種から芽が出て育つというイメージからかけ離れた、「自販機の種を蒔く」という設定に因るものと言っていい。種を蒔き続ける子どもの姿は、神々に終わることのない罰を課されたシーシュポスの姿と重なる。

同じ作者の作品に「口が図書館になったとき／何度も泣いた」というのがあるが、これも掲句と同様の色彩を持った作品だと思う。

ける。

ける。

夜がないている、

浪花　小槙　　東京都

「ける。」「ける。」というのは夜のなき声だろうか。そしてそれは誰へと向けられたものだろうか。行替えと空白から、間欠泉のような、なき声が浮かぶ。句読点が効果的である。

サイコロを
６が出るまで振るような
日曜だけが私に還る

寸草　　東京都

休日にはその人のしたいことが浮かび上がる。けれど何もしたくない日もあって、「サイコロを／６が出るまで振るような／日曜」も、そうした一日なんだと思う。サイコロで６が出ても出なくても、大した意味はない。それでも語り手は、日曜という日のために、サイコ

ロを振り続けるのだろう。

氷菓持ち走る子らより塩素の香

さほ　　神奈川県

一読して情景が浮かぶ。そして、その情景をより実感させるのが下の句の「塩素の香」。子どもたちの笑い声や、プールの匂いがこちらまで伝わってくる。俳句形式の良いところが存分に詰め込まれた作品。

あまりりす静かに麺をすするひと

大西　美優　　広島県

「りりす」と「すする」という押韻が効果的。「静かに」という説明を敢えて加えることで、その人物の現在地が描かれる。語り手が見るのは、何かに耐えて麺をすする人の背中だろうか。それとも、病身の女性が麺をすするところだろうか。どのような情景をかたちづくるかは読者の手に委ねられている。

軽トラの窓に肘おく夏の朝

深町　明　　福岡県

何のことはない夏の朝だけれども、それに心惹かれるのは、僕たちもまた、何のことはないものの一部でしかないことを、おぼろげながらに分かっているからかもしれない。それは、時折、僕たちをせつなくするけれども。軽トラの窓に肘を置くという瞬間に、代えがたいものを見るのは、そのためなのかもしれない。

冷たくなった魚から

檸檬の香りがする

波野　梅雨　　東京都

冷たくなった魚からする香りを檸檬の香りとしたところで、そこはもうこの世ではないどこかへ変わったのだと思う。語り手は、そのことばだけを残して、ここではないどこかへと行こうとしているようにも見える。